筑波大学附属図書館における国際インターンシップの受入について

嶋田　晋，福井啓介

抄録：本稿では筑波大学附属図書館における国際インターンシップの受入について報告する。筑波大学附属図書館では平成21（2009）年度より釜山大学及びハワイ大学からの国際インターンシップ学生の受入を行っており，通常のインターンシップのノウハウを用いてカリキュラムを構成するなどの対応を行っている。国際インターンシップ学生には概ね好評であるが，主に言語面をはじめとする課題がある。

キーワード：国際インターンシップ，図書館実習，学生，コミュニケーション，国際交流

1. 国際インターンシップの概要

筑波大学附属図書館（以下「附属図書館」）が受入を行っている国際インターンシップとは，筑波大学（以下「本学」）情報学群 知識情報・図書館学類[1]における「国際インターンシップ」の授業と対になるものである。そのため，まず知識情報・図書館学類の授業である「国際インターンシップ」を概説した上で，附属図書館が受入を行っている国際インターンシップについて概要を記す。

1.1　知識情報・図書館学類授業「国際インターンシップ」

知識情報・図書館学類では「海外における図書館・情報センターにおいて，情報の収集，処理，提供に関する業務の実際を理解する」[2]ことを目的として，「国際インターンシップ」という授業が開設されている。年度によって異同はあるが，平成25（2013）年度は韓国の釜山大学校（以下，「釜山大学」），アメリカのハワイ大学マノア校（以下，「ハワイ大学」）およびカナダの国際交流基金トロント日本文化センター図書館へ10日程度，学群（学部）学生の派遣が行われる予定である。

平成25年度は以下のスケジュールで行われる。

表1　平成25年度「国際インターンシップ」スケジュール

第1回説明会	1月
受講申し込み締め切り	2月
第2回説明会	3月上旬
受講者決定	
レポート提出 （日本の図書館事情・筑波大学について）	4月～6月
レポート提出 （当該国の図書館事情について）	7月
国際インターンシップ	9月の10日程度

説明会が1月に開催され，受講申し込み締め切りが2月，3月上旬に第2回の説明会と受講者の決定が行われる。4月から6月にかけて日本の図書館事情や筑波大学に関するレポートの提出が求められ，7月にはインターンシップへ出向く国の図書館事情に関するレポートを提出する必要がある。夏季休業中の9月の10日程度でインターンシップが行われる。平成25年度のシラバスには記載が無いものの，国際インターンシップの終了後には派遣者によるインターンシップ報告会が開催される（平成24年度は10月に開催された[3]）。なお，この「国際インターンシップ」は授業なので成績評価も行われ，インターンシップ前に提出するレポート，インターンシップ報告会，受入機関による講評を総合して評価が行われる[2]。

インターンシップのスケジュールは派遣先により異なるが，それぞれ派遣先の機関を拠点に，機関内の図書館での見学・実習を主に行うほか，周辺の類縁機関（博物館等）の見学等を行う。

1.2　海外からの国際インターンシップ

このように，本学の学生が海外の図書館ないし類縁機関へインターンシップとして出向くのに対して，逆に海外からのインターンシップ学生を本学が受け入れている。対象は釜山大学とハワイ大学で，釜山大学は交流協定締結校[4]であること，またハワイ大学はアジア太平洋地域での図書館情報学教育に関する国際会議A-LIEP 2009[5]が筑波大学春日エリアで開催された際に教員のコネクションができたことによる[6]。

国際インターンシップが知識情報・図書館学類の担当であるため，先方からのインターンシップの受入についても学類（教員）が担当しており，全体のスケジュール調整や先方とのやり取りは学類側で行っている。附属図書館では，日本の大学図書館の

実態を把握し業務に触れることを目的に，インターンシップ日程のうち1日程度を割り当てられ，業務等についてレクチャーを行っている。なお，他の日程は図書館情報メディア系の教員による講義や国立国会図書館の見学などが行われている。

表2　筑波大学附属図書館で受入を行った国際インターンシップ一覧

平成22年 2 月	釜山大学	3名
平成22年 5 月（2日間）	ハワイ大学	2名
平成23年 2 月	釜山大学	12名
平成23年12月	ハワイ大学	5名
平成24年 2 月	釜山大学	10名
平成24年12月	ハワイ大学	5名
平成25年 2 月	釜山大学	6名

※人数に通訳・引率の本学教員は含まない。

2. 筑波大学附属図書館の概要

附属図書館における国際インターンシップ受入の実際についての報告の前に，本学および附属図書館について略述する。

筑波大学は，東京教育大学の筑波研究学園都市への移転を契機に昭和48（1973）年10月に開学し，平成25（2013）年で開学40周年を迎える。また前身である師範学校の創立が明治5（1872）年なので，平成24（2012）年は創基140年であった。平成14（2002）年には図書館情報大学と統合し，東京の北方約60km，筑波研究学園都市の中核として258haの広大なキャンパスを持つ教育研究の拠点として機能している[7]。

附属図書館は合計で2万人を超える学生・教職員を対象に，筑波キャンパスに4館，東京キャンパスに1館の5館体制で運営されており，年間入館者数は5館合計で約100万人を数える。筑波キャンパスには中央図書館のほか，体育・芸術図書館，医学図書館，図書館情報学図書館を有し，東京キャンパスには放送大学東京文教学習センター図書室と併設されている大塚図書館が設置されている。

附属図書館ではディスカバリーサービスの導入や図書館ボランティアの活用，教員と連携した情報リテラシー教育など，先導的な取り組みを実施しているほか，最近では図書館キャラクターや広報活動，学習支援（ライティング支援）への取り組みも行っている[8]。また国公私立大学図書館協力委員会，国立大学図書館協会では，それぞれ常任幹事館，理事館を担っているほか，毎年大学図書館職員長期研修[9]を開催している。

なお，平成23（2011）年3月11日の東日本大震災では，特に体育・芸術図書館に大きな被害を受け，平成24（2012）年5月に至ってようやく復旧を果たした。附属図書館の被災については，大学図書館研究94号の記事を参照されたい[10]。

近隣にあったことから，以前より図書館情報大学の学生の図書館実習の受入を積極的に行っており，図書館情報大学と筑波大学の統合後も現在に至るまでインターンシップ学生を受け入れている。また統合後はシステム更新や研究開発室[11]などに見られるように，附属図書館と図書館情報メディア系の教員とが密接に連携して取り組みを行っているほか，学生が調査や研究のフィールドとして附属図書館を活用する例も多くなっている。

3. 国際インターンシップの受入について

3.1　受入の経緯

以下に国際インターンシップの受入の経緯について述べるが，最初に「インターンシップ」という言葉について注記する。科目名としてここ数年使われるようになった言葉であるが，本稿ではかつて「図書館情報学実習」または「図書館実習」と呼ばれていたものと同じ意味で用いる。本学においては平成20（2008）年度まで「図書館情報学実習」，平成21（2009）年度からは「インターンシップ」として開講された[12]。本稿においては，特定のものを除いて「図書館（情報学）実習」及び「インターンシップ」を全て「インターンシップ」と総称することとする。

附属図書館における国際インターンシップの受入は，図書館情報メディア研究科（当時）の教員より，平成21（2009）年度に釜山大学からの国際インターンシップ学生3名の受入を依頼されたのが端緒である。なお実際に来館したのは平成22（2010）年2月であった。以降毎年，韓国の釜山大学文献情報学科[13]およびアメリカのハワイ大学ライブラリースクール[14]からの国際インターンシップ学生の受入を行っている。多少の前後はあるものの，ここ数年は12月にハワイ大学，2月に釜山大学からの国際インターンシップ学生の受入というパターンが定着している（**表2**）。

当初，受入の是非については多少の議論があったものの，教員からの依頼であったこと，そして本学附属図書館にインターンシップ受入のノウハウが存在したこともあり，受入を決断するに至った。ただし最初の時点では，以降毎年国際インターンシップの受入を行うことについては言明されておらず，附属図書館としてはこの時1回限りの受入と認識していた向きもあった。

附属図書館では，例年知識情報・図書館学類のインターンシップを受け入れており，図書館情報学を専攻する学生のインターンシップ対応について，一定のノウハウは保持していた。内容は後述するが，国際インターンシップの受入に際しても，従来のインターンシップのカリキュラムをベースに，海外の学生向けのアレンジを行った内容とすることで，できるだけ受入の負担を減らすこととした。最大の障害は言語であるが，事前にある程度の日本語の理解力や通訳の有無についての情報提供を受入窓口である教員へ依頼し（附属図書館としては，可能な限り通訳ないし相応の日本語能力のある学生を対象とすることを希望し），それに応じた対応を行うよう決めた。参考までに**表 3** にインターンシップのスケジュールを示す。

附属図書館側の受入窓口は，他のインターンシップと同様，情報管理課（企画渉外）とし，教員との連絡やカリキュラムの策定，附属図書館でのインターンシップ中の運営・進行などを担当する。実際のレクチャーは副館長，課長，各業務担当が行うため，その調整役も担った。

表 3　インターンシップのスケジュール（平成 24 年度）

7 月 23 日	オリエンテーション，副館長・課長による概要説明，各館見学，図書館プロモーションビデオ鑑賞
7 月 24 日	雑誌・新聞の受入
7 月 25 日	図書の選書・受入
7 月 26 日	図書の整理について（和書目録），特殊資料について（古典資料）
7 月 27 日	図書の整理について（洋書目録），書庫管理
7 月 30 日	図書の貸出・返却ほか
7 月 31 日	図書の貸出・返却ほか
8 月 1 日	レファレンス
8 月 2 日	相互利用
8 月 3 日	電子図書館，リポジトリ，情報交換

また附属図書館の各種行事やレクチャー担当者の都合も勘案し，国際インターンシップ受入のスケジュールについては教員と相談した上で双方に支障のない日程をできるだけ早い段階で確定するよう努めた。

初回の受入以降，毎年国際インターンシップの受入を打診されているが，2 回目以降は初回受入の際のノウハウを生かすことで，さほど支障なく受入を行うに至っている。また，国際インターンシップ受入の手順については，現在に至るまでほぼ同様の方法で行われている。今後も安定して国際インターンシップの受入が続くようであれば，定常業務として位置づけることも可能であると考えている。

3.2　受入の実際

これまで国際インターンシップの受入を行った際，附属図書館が担当するのは 1 日が中心であった。一度 2 日間で受入を行った場合もあり，それ以外の場合でも 2 日間を打診されたこともあったが，スケジュールの調整ができず，残念ながらこれまで 2 日間の受入は 1 回のみにとどまっている。

わずか 1 日ということで，見学中心にカリキュラムを組むこともできたが，日本の大学図書館の状況や附属図書館での業務の実際を知ってもらえるよう，また座学だけでなくワークショップの時間をできるだけ多く取るよう努めている。日本の大学図書館の状況についてどの程度の予備知識があるかによってレクチャー内容は変わってくるが，例年確認している限りではさほど詳細に知っている様子ではないので，予備知識がほぼ無いものとして（通常のインターンシップ学生と同程度のものとして）対応している。

表 4 は平成 25（2013）年 2 月（平成 24 年度）に釜山大学の国際インターンシップ学生の受入を行った際のカリキュラムである。その都度，多少の異同はあるものの，概ね**表 4** のようなカリキュラムをベースに受入を行っているので，例として掲載した。なお昼の休憩時間を長く取ってあるのは，通訳を介することによるレクチャー時間の超過や，不慣れな本学キャンパスでの昼食・移動などに手間取った場合でも，それらの時間超過などを吸収し以降のスケジュールに影響が出にくいようにするための措置でもある[15]。

またレクチャー担当者の都合や国際インターンシップ学生の希望にもよるが，学生の集中力や緊張感の持続という面を勘案して，座学の類はできるだけ午前中に配置し，午後は見学やワークショップなど，体を動かすものを中心に構成するように努めている。

表 3 と比較すると分かるが，通常のインターンシップのカリキュラムから，個別業務での実習や中央図書館以外の館の見学を省いたものとなっており，わずか 1 日ながら，附属図書館での業務のエッセンスを伝えるものになっていると考える。

表 4　平成 24 年度国際インターンシップ受入カリキュラム（釜山大学）

時間(目安)	レクチャー内容	担当
9:00-10:00	筑波大学附属図書館の概要及び日本の大学図書館の動向	副館長（部長）
10:00-10:45	筑波大学附属図書館のサービス	情報サービス課長
10:45-11:15	学術機関リポジトリ	情報管理課長
11:15-13:30	休憩	
13:30-14:10	館内見学	見学・ボランティア担当及びボランティア
14:10-14:50	古典資料	情報管理課副課長
14:50-15:00	休憩	
15:00-17:00	和装本の修理ワークショップ	古典資料担当専門職員

カリキュラムの内容は，受入の際の附属図書館の状況（業務担当者のスケジュール）や，国際インターンシップ学生の興味などによってその都度異同はあるものの，概ね以下のものを中心に構成している。

・筑波大学附属図書館の概要及び日本の大学図書館の動向
・筑波大学附属図書館のサービス
・館内見学
・古典資料
・和装本の修理ワークショップ

次項から簡単に各項目の内容を解説する。

3.2.1　筑波大学附属図書館の概要及び日本の大学図書館の動向

筑波大学の概要，歴史と附属図書館の概要や構成について，また日本の大学図書館全般についての概説を行っている。ここ数年は大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）の話を盛り込むなど，その時々に応じた日本の大学図書館の話題を国際インターンシップ学生に伝えるものとなっている。

3.2.2　筑波大学附属図書館のサービス

附属図書館で行っている各種サービスについて具体的に解説を行う。この 1，2 年では従来のサービスの他に学習支援の取り組みにも重点を置いて解説を行っている。また東日本大震災以降は，国際インターンシップ学生の興味も高いため，同震災における被災状況についての説明も合わせて行っている。

3.2.3　館内見学

概要やサービスの説明を受けた後に見学を行うことで，予備知識の無い状態に比べて，理解が深まることを期待している。見学担当の職員が行うこともあるが，都合がつけば外国語に堪能な図書館ボランティアにより国際インターンシップ学生の母国語で見学案内を行うようにしており，好評を得ている。

図 1　国際インターンシップ 見学風景（平成 24 年度ハワイ大学）

3.2.4　古典資料

附属図書館には多くの古典資料や貴重資料があるが，レクチャー担当者の工夫により，国際インターンシップ学生の大学や国に縁のある資料や，古地図などのように文字だけによらない資料を紹介し，実際に手に取って見てもらえるような内容としている。自分の大学や国に関係する資料や，目で見て内容がある程度把握できる資料を間近に見ることで，国際インターンシップ学生の興味を大きく惹き，また日本と自国との関係の深さを実感できる機会にもなっているようだ。

図 2　古典資料のレクチャー風景（平成 24 年度ハワイ大学）

3.2.5 和装本の修理ワークショップ

特にインターンシップ学生に好評なのが，この和装本の修理ワークショップである。両大学とも図書館には相当数の和装本の所蔵こそあるものの，実際に学生が手に触れたり，修理を行ったりする機会は多くないようで，例年「大変エキサイティングであった」との評を得ている。

ワークショップ担当者が，糸が切れている，あるいは切れそうな和装本を予め用意しておき，国際インターンシップ学生に四つ目綴じを実際に行って修理してもらうというワークショップである。まず担当者が実演するのを見た上で，最初は危うい手付きでテキストと見比べながら針と糸を手に本を綴じていく場合がほとんどである。途中で手順を誤る学生も少なからずいるが，担当者や補助の職員からアドバイスを受けながら進めていくうちに，綺麗に和装本が修理される。飲み込みの早い，また手際の良い学生の場合は，時間内に数冊の綴じを行ったり，他の学生のサポートを行ったりするといった光景が見られる。いずれにしても，実際に手を動かし成果が形として残ることで，国際インターンシップ学生も達成感が大きいようである。

図 3 和装本修理ワークショップ（平成 24 年度釜山大学）

3.2.6 その他

この他，具体的な業務について知りたいという要望が事前に出ていれば，また当該業務の担当職員の都合がつけば，その具体的な業務についてのレクチャーやワークショップを行う場合がある。これまでに機関リポジトリ，図書資料の購入・装備，電子資料の整備などについてのレクチャーを行ったことがある。

また，スケジュールや時間の残り具合にもよるが，業務全般についての質疑を受け付ける時間を設ける場合もある。質疑応答の際には，学生にもよるが様々な質問が出てきて非常に興味深い。これまでの傾向を見ると，日本全体の状況に関するものや，本学固有の状況に関する質問が多かった。一方で「なぜ図書館員になったのか」「図書館員としてやりがいを感じることは何か」など，学生ならではの質問を受けたこともあり，その意味では通常のインターンシップと大差ないと感じる面もあった。

4. 国際インターンシップ受入の課題

これまでのところ，附属図書館での国際インターンシップの受入は特に大きな問題なく行われているが，全く課題が無いわけではない。以下に大きく二つに分けて，附属図書館が認識している国際インターンシップ受入の課題を提示する。

4.1 受入側の課題

国際インターンシップの受入を行うにあたって，当初から懸念されており，現在でも配慮が必要な問題がやはり言語である。通訳（ないしある程度通訳の役割を担う人）が随行する場合もあるものの，そうでない場合もあり，その都度受入担当の教員に確認して対応を考慮している状況である。また「ある程度日本語が理解できる」「ゆっくり喋れば理解できる」とされた場合でも，専門用語や業務で用いる用語などへの対応が難しい場合もあり，十分な意思疎通が図れないこともあった。

日本語でのコミュニケーションが困難な場合は，レクチャー担当者が英語を用いて説明することもあるが，これも十分に伝えたいことを伝えきれない可能性があり，レクチャーを十全に行えているかという点には疑問が生じる。これに関連して，「日本語があまり通じない」という条件では，レクチャー担当者が対応を渋るというケースも散見される。

またカリキュラム全般に言えることだが，限られた時間でもあり，通常のインターンシップにおいて日本語を用いて日本人に説明する際でも必ずしも十分な説明ができない場合があるが，国際インターンシップでは通訳が間に入ったり，学生の日本語の理解に若干難があったりする場合などがあり，さらに時間の制約が生じることが多い。通訳が入る場合などは，それを勘案した時間配分を行うようにしてはいるが，場合によっては時間の超過によって，レクチャー担当者が用意した内容を予定通り伝えきれないこともある。

さらに，例えば年度末に近い時期だと図書・雑誌の契約や購入に関わる担当が多忙になりレクチャー

を依頼しにくいなど，時期や他の都合との兼ね合いで必ずしも国際インターンシップ学生の希望に添えない場合もあり，希望するメニューを提供できていないのではないかという懸念もある。

4.2 国際インターンシップ学生の課題

国際インターンシップ学生は，概ね熱心で日本の大学図書館や附属図書館に旺盛な関心を持ち，また自大学の状況についても附属図書館に情報提供してくれることがあるため，レクチャー担当者としても短いながらも非常に有意義な時間を過ごすことができる。

しかしながら，ごく稀にではあるが関心があまり高くないように見受けられる学生もおり，対応に苦慮することがある。言語の問題もあるため，レクチャー等に対して一見不熱心な印象があるように見えるのはやむを得ないとも言えるが，集合時間に遅れるなどの場合もあり，インターンシップへの取り組み姿勢にややギャップを感じることがある。ただ，このような場合も考慮して先述のようにスケジュールはやや余裕を持たせるようにしており，さほど影響が出ないように配慮している。

これらの国際インターンシップ学生の要望や，彼らのインターンシップへの意識について，どのように，またどこまで取り入れて国際インターンシップ受入に生かしていくかについては今後の課題であると認識している。

5. 国際インターンシップ受入の影響

海外の学生に対して，自らの業務や日本の大学図書館の状況をわかりやすく説明するということは，各レクチャー担当者にすれば決して長時間ではないが，新鮮で非常によい経験になっていると言える。場合によっては英語での説明，コミュニケーションになるため，国際インターンシップ受入での経験が語学習得のモチベーションとなることもあるようだ。

一方，通常のインターンシップのカリキュラムをベースに組んでいるため，言語を除いては資料やノウハウを流用することができ，各レクチャー担当者に過大な負担をかけることなく，受入ができていると言える。また，実際のレクチャーの感触や感想から，言語を除けば日本人のインターンシップ学生とあまり変わらない対応で，国際インターンシップ学生に対しても，ある程度の希望を満たせることが分かったことは，知見として大きい。こと附属図書館で受入を行った国際インターンシップ学生に関して言えば，「学生」のレベルという点では，日本と米韓でさほど大きな差異が無いようにも感じている。もちろん，さらに長期間の受入を行った場合にどのような違いが見られるかについては興味がある。

6. 今後と展望

附属図書館は今後も引き続き国際インターンシップの受入を行っていくことになるだろうが，開始から4年を経てある程度の定型的業務として受入を行えるようになったと言える。しかしながら，国際インターンシップ学生自身からのフィードバックを十分に得られておらず，これまでのカリキュラムが本当に妥当なものであったかについては，検証の余地がある。

本学においても「国際性の日常化」[16] が提唱され，またカウンター業務では日常的に海外出身者への対応が行われている現状を考えると，国際インターンシップの受入についても，何らかの見直しが必要な時期に来ていると考えられる。少なくとも，この国際インターンシップの受入を「特別なイベント」と見なすのではなく，日常的な対応の一環とできるよう，考え方の転換や環境の整備，職員のスキルアップを図ることが今後必要になるだろう。

図書館情報メディア系の教員とも緊密に連携しながら，最終的には「インターンシップ」そのものについても，成果の可視化を含めて，あり方や方法を見直していくべきであると考える。将来的には，国際インターンシップ受入は，その中での一バリエーションと位置付けられるものになると考えられる。

最後になりましたが，本稿をまとめるにあたって，筑波大学図書館情報メディア系呑海沙織准教授より資料の提供を賜ったことに謝意を表します。

註・引用文献

1）筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類. "筑波大学 情報学群 | 知識情報・図書館学類" http://klis.tsukuba.ac.jp/,（参照 2013-04-30）
2）筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類.“平成25年度 知識情報・図書館学類 開設授業科目シラバス” http://klis.tsukuba.ac.jp/assets/files/Syllabus20130401.pdf,（参照 2013-04-30）
3）筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類.“平成24年度 知識情報・図書館学類 開設授業科目シラバス” http://klis.tsukuba.ac.jp/assets/files/Syllabus120414.pdf,（参照 2013-04-30）
4）筑波大学.“筑波大学｜国際交流｜協定締結校一覧” http://www.tsukuba.ac.jp/global/interaction.html,（参照 2013-06-12）
5）Graduate School of Library, Information and Media

Studies, University of Tsukuba.“A-LIEP 2009（6-8 March 2009）: Asia-Pacific Conference on Library & Information Education and Practice”http://www.slis.tsukuba.ac.jp/a-liep2009/index.html,（参照 2013-04-30）

6）なお，両大学へ筑波大学から国際インターンシップへ行った人数は以下の通りである。

	釜山大学	ハワイ大学
平成 21（2009）年度	0 名	3 名
平成 22（2010）年度	2 名	0 名
平成 23（2011）年度	3 名	1 名
平成 24（2012）年度	6 名	0 名

7）筑波大学.“筑波大学｜大学案内｜筑波大学の歴史（沿革）”http://www.tsukuba.ac.jp/about/history.html,（参照 2013-06-12）

8）筑波大学附属図書館.“筑波大学附属図書館の概要 -筑波大学附属図書館-”https: //www. tulips. tsukuba. ac. jp/portal/gaiyo.php,（参照 2013-04-30）

9）筑波大学附属図書館.“大学図書館職員長期研修”http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/choken/welcome.html,（参照 2013-04-30）

10）渡邉朋子, 船山桂子, 大和田康代. 東北地方太平洋沖地震における筑波大学附属図書館の被害と復旧活動. 大学図書館研究. 2012, Vol.94. p.18-27.

11）筑波大学附属図書館研究開発室.“PukiWiki - 筑波大学附属図書館研究開発室”https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/RDO/index.php,（参照 2013-04-30）

12）緑川信之. 実習・インターンシップについて. KLiS TODAY. 2008, No. 4, p. 1. http: //klis. tsukuba. ac. jp/assets/files/KLiS_TODAY_No4. pdf,（参照 2013-04-30）

13）부산대학교 문헌정보학과.“부산대학교 문헌정보학과”http://info.lib.pusan.ac.kr/,（参照 2013-04-30）

14）University of Hawai'i at Manoa Library and Information Science Program.“Home - UH Manoa LIS Program”. http://www.hawaii.edu/lis/,（accessed 2013-04-30）

15）これまでの受入において，レクチャー時間の超過や昼食・キャンパス移動に手間取ったことで，午後のスケジュールに影響が出たことがある。そのため，以後の受入においては昼休みを長めに設定するなどして，できるだけ余裕時間を持たせるようにしている。ただし希望があった場合などは，余裕時間を削ってレクチャーを入れることもある。

16）筑波大学.“筑波大学｜国際交流｜国際化戦略”. http: //www. tsukuba. ac. jp/global/strategy. html,（参照 2013-06-12）

＜2013.4.30　受理
しまだ　すすむ　筑波大学附属図書館情報管理課主任，ふくい　けいすけ　放送大学学園教育研究支援部図書情報課課長補佐（3 月まで筑波大学在職）＞

Susumu SHIMADA, Keisuke FUKUI

The acceptance of international internships in the University of Tsukuba Library

Abstract：This paper reports on the acceptance of international internships at the University of Tsukuba Library. The University of Tsukuba Library has been accepting international student interns from Pusan National University and the University of Hawaii since 2009, utilizing their pre-existing knowledge about regular internships to develop an appropriate curriculum that would meet student needs. While the program has had a favorable response from students, there are a number of issues that need to be tackled including linguistic barriers.

Keywords：international internships / library practicum / students / communication / international exchanges